

2021 年度「FDを推進するための活動補助」報告書

札幌学院大学 学長 殿

2022 年 2 月 28 日

(申請者名) 松 井 光 一	(複数で申請の場合、参加教員の氏名)
(科目名) 子どもの体育Ⅱ	
(取組の趣旨、実施計画、今年度の達成目標) の報告 <趣旨> 今私たちが生きている時代は、コロナ禍における教育内容の構築に象徴されるように、今まで経験したことのない出来事に対しても対応できる資質・能力が求められている。その中心となるのは、テストで測定できる「認知能力」だけではなく、「やり抜く力 (GRIIT)」や意欲・向上心、コミュニケーションスキルや共感性など「非認知能力」と言われる資質・能力であるとして注目されている。非認知能力は、現在いろいろな識者が多岐にわたり多くの内容を研究し発表している。私は SGU 教師教育研究第 34 号において、「やり抜く力 (グリット)」について簡単な分析をしているが、評価スケールが外国のものであるため別のスケールを探していた。そこで今回は岡山大学の「成果外活動支援のための非認知能力アセスメント項目 (簡易版)」を使用し、本学新入生に実際にどのような支援をしていけばよいかを探っていきたい。 さらに追加の取組として、体育科指導法の観点から、非認知能力と「体力」及び「運動量」との関係性を調べていくこととした。体力は、人間の筋力をほぼ表すといわれている「握力」を目安として分析することとし、講義「スポーツ」を担当されている濱野教授から対象学生の握力データを借用させていただきその関係性を分析した。 運動量は、目安として「歩数計」の数値データを活用するため、後期の講義「子どもの体育Ⅱ」において歩数計を使用し、講義前と後での歩数を運動量として測定した。 <実施計画>—追加の取組 小学生の体育授業を学ぶ「子どもの体育Ⅱ (後期) 履修者 37 名」において次のように実施した。 ・「子どもの体育Ⅱ」の講義は 15 回すべて対面で行うことができたので、毎回歩数計のデータを測定した。 ・濱野教授より、対象学生の大学入学時及びその後の「握力」データを借用した。 <今年度の達成目標> 非認知能力の項目調査第 1 回目 (子どもの体育Ⅰ) と第 3 回目 (子どもの体育Ⅱ) のデータと、体力 (目安として握力データ)、運動量 (目安として歩数計データ) との関係性が見られるか分析する。	
(期待された効果、他の授業科目への適用可能性) の報告 <実施結果> ○非認知能力と握力 (体力) との関係性 ・握力測定値が平均以上のグループと平均未満のグループの 2 つに分けて、その非認知能力の値を比較した。 1 回目、3 回目共に測定値の差がみられた。特に第 3 回目では大きな差がみられた。 ・このことから、握力 (体力) の高いグループは、握力 (体力) の低いグループより、非認知能力の値が高いといえる。 ○非認知能力と歩数 (運動量) との関係性 ・「子どもの体育Ⅱ」の講義中の歩数値が平均以上のグループと平均未満のグループの 2 つに分けて、その非認知能力の値を比較した。 1 回目と 3 回目共に非認知能力の値と「子どもの体育Ⅱ」の講義における歩数 (運動量) の多いグループと歩数 (運動量) の少ないグループとの関係性に顕著な差がみられなかった。 ・このことから、講義中の歩数を運動量とすることだけでは、非認知能力の値と歩数 (運動量) の多いグループと歩数 (運動量) の少ないグループとの関係性を正確に測定することはできないことが考えられた。 <期待された効果と他の授業科目への適用可能性> 体力と非認知能力との間に関連があり、体力の高い人は非認知能力も高い傾向にあるということが分かったが、対象人数の少なさや、体力を握力のみで考えることの不確実さ、歩数を講義だけでなく 1 日つけてみての生活運動量として測定する必要性など、課題が多くわかってきた。 今後は、これらの課題を解決していくことで、体力や運動量と非認知能力との関係性を明らかにしていきたい。また、学生への支援の具体的な取組として、学生の運動量を促進することで非認知能力を育むことができるのではないかとについても今後の課題とする。	
(所要経費及び実施時期) の報告 運動量を測定するための方法として歩数の測定を考えたので、手軽で精度がよく測定しやすい歩数計と歩数計用電池を吟味して購入した。	
(執行経費内訳)	
・歩数計 (1 個 1,573 円×40 個分)	¥62,920 ・歩数計用電池 (CR2032) 1 個 269 円×40 個 ¥10,736 円 合 計 73,656 円